

17世紀好古学文献の変容と読者の受容

高野 美千代

Developments in 17th-century English Antiquarian Books, and their Reception by Readers

TAKANO, Michiyo

Abstract

William Camden's *Britannia* provided vigour to a new literary movement in early modern Britain, and his successors continued antiquarian studies throughout the 17th century. *Britannia* made it clear that legend and history are two different things, and traced the progress of the British peoples and their social institutions. It also introduced a new literary genre, topography, to English. This study discusses Camden's influence on his successors, and looks particularly at the development and changes of the books in this genre assuming that the books do reflect their readership. The antiquaries examined in this study include William Dugdale, Anthony Wood, Aylett Sammes, and Robert Plot.

Key words : antiquarian studies, William Camden, *Britannia*, William Dugdale, Anthony Wood, Aylett Sammes

はじめに

17世紀英国で好古学研究は開花の時期を迎えた。数々の重要な好古学者が作品を出版したが、書物史においてそれらの作品群にはどのような意義が認められるだろうか。書籍製造に関わる技術的側面、出版制度、識字率、その他の諸要素から17世紀書物史にアプローチすることは可能であると言えるが、本研究においては、書物の受容の歴史と書物自体の変容は、相互に深く関係するものと仮定して好古学書の論考を進めたい。そして英国17世紀の100年の間に出版され受容された好古学研究の書物とその変容を考察し、最終的には書物と社会あるいは書物と読み手の意識の変化の関係を分析することを試みる。

今日の17世紀英国好古学文献の研究はGraham Parryによる金字塔的研究書 *Trophies of Time* (Oxford University Press, 1998) が世に出されて以来、世界的に浸透し、徐々に進展してき

た。ParryはCamden以降の複数の好古学者、すなわちCotton, Selden, Spelman, Ussher, Dugdale, Aubreyなど各々にチャプターを費やして作品とその歴史的・思想的背景を論じた。その後の研究ではこれまで情報が不足していた伝記的事項が提示され、各作家作品の分析が進められた。また、17世紀英国好古学の発展におけるヨーロッパ人文主義の影響に重点を置いた研究も最近になって発表されるなどしている。¹ 本研究はこれら先行研究を踏まえながらも、作家作品論を展開するのではなく、書物史の視点からパラテキストに重点を置いて好古学書にアプローチする。そしてむしろ作品がいかに書物という形となって現れ、変化を遂げながら当時の読者に受容されたのかを中心に考察する。

17世紀の好古学文献を扱う本論考においては、複数の作家の作品に注目することになる。まずは最も影響力の大きな作家William Camden

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

(1551-1623)について検討を行う。彼の主要作品 *Britannia* はエリザベス朝の1586年に初版が出版された。それはラテン語によるOctavo判、556頁の書物であった。あまりにこの作品が有名であるがゆえにCamdenは17世紀というよりも16世紀の人物、あるいはエリザベス朝の作家との印象を持たれがちであるかもしれない。しかし、*Britannia* はその後長いこと発展し続けた作品である。第3版(1590)に初めて地図が挿入され、第4版(1594)で一回り大型のQuarto判となった。その後、17世紀に入って出版された第6版(1607)でFolio判になり、ついに英語版が1610年に出版され、ますます読者層が拡大していった。さらには17世紀末には増補版(1695)が出版され、新たな地図が挿入され、注釈付となった。出版の年代を確認するだけでも、この書物が17世紀の100年間にわたり英国で受容された歴史を持つことが明らかとなる。Camdenに続く世代の好古学者たちはどのように母国の過去を辿り、分析していったのだろうか。そして彼らの著作はどのように世に出て行ったのか。17世紀に受容された好古学文献、とくにWilliam Dugdale, John Speed, Robert Plot, そしてAylett Sammesの作品を考察対象として扱いつつ、検討を行いたい。

本論考で使用する用語「好古学」とは英語の“antiquarian studies / study of antiquities”を訳したもので、「考古学」“archaeology”とは異なる。また、「歴史」“history”とも同一のものではない。とくに「好古学」(すなわち“antiquities”に関する研究)と「歴史」(“history”)は混同されることも多い。本論考を進める前に、ここでそれぞれの用語の明らかな特徴を示し、違いを明らかにしておきたい。

たとえば17世紀の書物に *Historia et Antiquitates Universitates Oxonienses* という表題の本がある。好古学者Anthony Woodによる著作であるが、英語に訳せば *The History and Antiquities of the University of Oxford* ということになる。「歴史」“History”と「故事」“Antiquities”を同時に使用している例である。この2語はともに過去を扱うものであるため、区別をつけがたい。しかし、「歴史」は複数絡み合った過去の出来事がナラティブ

としてつづられている。一方の「故事」は個々の遺物を分析するといった傾向を持つ。17世紀に出版された同時代史では表題に“history”を使用する。たとえばGilbert Burnetによる *The History of the Reformation of the Church of England* (1679-)が扱う時代はヘンリー八世の治世以降の「近い」過去を扱ういわば同時代史であった。同じ著者による *The History of His Own Time* も王政復古期からの歴史を扱う同時代史である。

つまり、日本語で「好古家」、「好古学者」などと訳される“antiquary”はおもに史料・文献によって過去の研究をした。ギリシャ・ローマの文献を紐解いたり、イギリスに残る古文書やコインなどから、古代の社会制度、文化風習、宗教などを探るなどしていた。文献学に詳しく、言語から過去をたどろうという発想を持っていた。そして歴史家が扱うよりもより遠い過去を、あるいは資料が十分に残っていない時代を研究対象としたとみなしてもよいだろう。また、“Archaeology”すなわち「考古学」では発掘作業を行い、そこで得たモノから過去の生活や文化を探るが、「好古学」における関心の中心は文献資料であった。たびたび混同して使用される言葉でもあるし、好古学者が同時に歴史家であり考古学者であるというケースももちろんある。したがって、それぞれの著書における研究アプローチによって区別することが可能となる。

1. Camdenの*Britannia*が持つ影響力

Camdenの*Britannia*は初版(1586年)から決定版と言われる1695年版にいたるまで、変容を続けた。書物が変わったことには明らかに理由があるはずで、それを解明しながらその他の著者による好古学書についても検討を行いたい。初版が出されるまでの背景を踏まえて、*Britannia*を受容した読者層そして社会を考察しよう。

Camdenについて考えるとき、「考古学者」としての一面も否定できない。ハドリアヌスの防壁で発掘作業をし、ローマ期の遺跡をみつけてそれを研究対象としたこともあるCamdenは、実際には「好古学者」と「考古学者」両方の性格を持

ち合わせたと言えよう。Camden の生涯についてごく簡単に触れておくが、彼は 1551 年生まれて 1623 年に没した。時代的には 12 歳から通ったロンドンの聖ポール校 (St Paul's school) ですでに好古学研究への興味を持ち始めた。かなり早い時期から母国の過去について好奇心をそそられていたことになる。その後 1566 年にオックスフォード大学に入学し、友人関係に恵まれて勉学を続けたものの、宗教的対立に巻き込まれて学位を授与されることなく 1571 年に 20 歳で大学を去った。その後 4 年間は英国中を旅して、やがて著書となる *Britannia* の下地作りを開始した。Camden は 1575 年に名門のウェストミンスター校の教師となり、そこで教鞭をとる一方、*Britannia* のための資料収集を継続して行い、執筆を終了し、出版にこぎつけることになる。Camden の研究手法は旅行で集めた資料分析、古文書の精読によるもので、それは *Britannia* 制作のきっかけとなった地理学者・地図作成者オルテリウス (Abraham Ortelius) に触発されたものであった。Ortelius は 1570 年に世界初の近代地図と言われる *Theatrus Orbis Terrarum* を出版しており、1571 年には英国を訪れて調査を行っていた。彼はローマ帝国の地図の制作・出版に関わっていたことでよく知られるが、地図作成のみならず、コインやメダル等の古物を好み、*Deorum dearumque capita* (1573) を出版している。Camden と同じ興味を持つ人物であったことは確かであるが、この Ortelius からの依頼もあって、*Britannia* はヨーロッパ各国の学者に向けてラテン語で執筆されることとなった。²

Camden は古い歴史を持つイングランドのトポグラフィーを記録することで自国の価値を明らかにしようとしたと考えた。1586 年に出版した *Britannia* はローマ時代のブリテン島の名前がタイトルとなっている。ローマ時代は文明化され様々な分野が発展した時代であったので、国力が繁栄するエリザベス朝をローマ時代の再来と位置づけたと考えることができる。とすれば、Camden は国内外の彼の同時代人が *Britannia* を通してイングランドの価値を認識するように望んだということになる。

1550 年から 1570 年代、ヨーロッパにおいてはローマ帝国やローマ時代の様々な制度、他民族に文明化をもたらした方法 (civilizing process) などが研究され理解されていたが、英国は例外であり、400 年にわたるローマのブリテン島支配に関しては当時十分な資料もなく書物も残っていなかった。不足する資料を収集し整理することになったのが Camden であった。先ほど触れたように、*Britannia* 執筆の直接の動機となったのはローマ帝国の地図の作成／出版に関わっていた Ortelius からの依頼とされているが、その他にもケンブリッジ大学の総長 (Chancellor) でありエリザベス女王の寵臣であったバーリー卿も Camden に執筆を促したとされ、*Britannia* 初版にはバーリー卿への献呈の辞がある。Radulph Newbery による出版であるが、彼は 1570 年代から 90 年代にかけて精力的に活動していたロンドン書籍商である。

このような背景があってイギリス人の起源をたどる *Britannia* が書かれることになった。ローマ時代以前のイギリスの社会を再構築するための手段として Camden が考えたのは、Caesar や Tacitus の第一次資料を分析することである。歴史を史料からひも解くというアプローチは伝説からの脱却につながる。つまり、当時は中世からの伝説として、トロイ起源説があった。これはトロイの英雄 Aeneas の孫にあたる Brutus がイギリスを築いたので “Britain” との名が残ったというものであったが、Camden はその言い伝えを信じてはいなかった。

1607 年版のブリタニア口絵 (図 1) を見ると、いくつか注目すべき点がある。実は初版 (1586 年) にはイングランドのみであった図が 1603 年版からブリテン島を掲載するようになっているが、上部には女神ブリタニアが描かれている。ブリタニアは 2 世紀頃から描かれるようになった、武装した姿の女神である。中央のブリテン島の図の左右にはブリテンの豊饒を象徴するネプチューンとセレスがいる。海神ネプチューンは、魚を取る三つ又の「やす」(trident) を持ち、島国イギリスが誇る海の豊かさを表している。一方、農神セレス

は麦と鎌を携えており、これは国土の豊かな実りを暗示している。図の下の部分は3つに分かれ、左から順に、貿易または海軍の力を暗示する船舶、ストーンヘンジとローマ風呂とともに描かれる典型的な形のイギリスの村、そしてキリスト教の信仰を表す教会、それぞれの絵が並んでいる。これら全てが当時のブリタニアの姿を表現していると考えられる。国の繁栄、幸福、ナショナリズムなど、エリザベス朝にふさわしいポジティブな姿が表現されている。



図1 Britanniaの口絵

このような母国に対する自負心にあふれる挿絵は当時ほかにも見受けられ、これに似た書物の口絵／挿絵は、1611年のJohn Speedによる*The Theatre of the Empire of Great Britaine*が良い例である。そこにはイギリス国民のルーツである5民族が登場する。戦闘に長けた野蛮な姿のブリテン人、より洗練されたローマ人、大きな楯を持ったサクソン人、劇の登場人物のようなデーン人、弓を持つノルマン人、それぞれが特徴を持ったコスチュームで描かれている。また、Michael Draytonの*Poly-Olbion*（意味：diversity or richness of Britain）の口絵は女神のような女性が中心に座している。地図を見にまとい権力を象徴する笏（scepter）を手にしている。果物や穀物を片手に抱える姿は豊饒を象徴する。中心の女神を取り巻くのはトロ

イア人（ブルータス）、ローマ人（ジュリアス・シーザー）、ノルマン人（ウィリアム征服王）、そしてサクソン人である。さらにPoly-Olbionに収められたコーンウォールとデボンの地図を見ると、川には妖精が、丘には羊飼いがいて、各々の地域の歌を歌っている。また、海にはネプチューンがおり笛で音楽を奏で、生き生きとした地図となっている。

さて、17世紀アンティークエリーの系譜をWilliam Camdenを中心に考えていくとき、Camdenの代表作*Britannia*をまず扱うべきである。この作品によって彼はイギリスの国土、歴史、地形を題材とし、エリザベス朝に新たな、いわばナショナリスト文学を生み出した。16世紀、宗教改革によりイングランドはカトリックからプロテスタントに改宗して、ヨーロッパ諸国とは異なる宗教的アイデンティティを築いていたし、さらにはエリザベス女王による国家の繁栄、そして植民地の獲得などによって、国がエネルギーに満ち溢れていた時代であった。

Britannia siue Florentissimorum regnorum, Angliae, Scotiae, Hiberniae, et insularum adiacentium ex intima antiquitate chorographica descriptio は初版が1596年、ラテン語によって出版された。その後数回再版され、英語訳はジェームス一世の時代、1610年に出された。書籍のサイズも最初はオクターヴォ判であったものがちにクォート、そしてフォリオと大判になり、内容もほとんど文章であった初版から、最終的には多くの図版を含むようになっていた。英語版によって*Britannia*はさらに普及し、好古学研究の金字塔と言える作品となっていた。Camdenがこの世を去ってから半世紀後、1695年には増補版が出版されることになるが、それが現在では決定版とみなされる内容となっている。このことから初版から約100年の間も継続してこの書物がイギリスの好古学研究に大きな影響力を持ち続けたことがわかる。

また、*Britannia*は後世の研究者に好古学研究の方向性を示すことになった。研究の主題は国家の起源や歴史および国土の詳細であり、Camdenは古い文献資料と史跡（遺跡）の観察を基にした

研究を展開した。伝説と事実を別のものとして扱い、当時読まれていた歴史書や年代記が扱う以外の膨大な量の遺跡について調査して、文献資料と遺跡の双方を扱う研究方法を取った。

その他の著作を挙げると、Camdenは1600年『ウェストミンスター寺院の碑文』(*Reges, reginae, nobiles et alii in ecclesia collegiata B. Petri Westmonasterii sepulti, usque ad annum 1600*)で教会内の墓碑を記録した。さらに1605年に出版した『英国の遺物／リメインズ』(*Remains Concerning Britain*)でCamdenはサクソンへの関心を示し、サクソン人が国家成立に寄与したことを主張した。*Remains*は1674年までに7回再版されるなど多くの関心を集めた作品である。内容は*Britannia*よりも日常的な研究主題を取り入れたもので、カバーする範囲は言語、紋章、苗字・名前の由来、格言など、多岐にわたっている。

Camdenは後に続く17世紀アンティークエリーに多大な影響を及ぼしたが、ここではトポグラフィーという、一種のジャンルの定着についても注目したい。トポグラフィーは地域の地形歴史文化風習を扱うもので、日本語では地誌学と呼ばれることもある。Camden以降、この分野の研究も盛んになり、たとえばWilliam Dugdaleの*The Antiquities of Warwickshire* (1656)などにみられるように17世紀の学者たちはCamdenにならってトピックを拡大して1冊の著作を発表していった。地図や遺跡の版画挿入によって地域への関心はさらに高まることにつながる。英国各地でトポグラフィーを扱う書物が次々と書かれるようになったのは、この頃からである。つぎに重要なカムデンの功績は、モニュメント、古物の記録を徹底させたことである。実際にCamdenは古文書を分析する緻密な作業に加えて、ローマ時代の遺跡で発掘作業を行ったこともあり、各地の教会で碑文を書き写すという作業を丁寧にこなした。彼が行ったこのような実証的歴史研究方法は、多くのアンティークエリーに受け継がれた。ブルータス神話をやんわりと否定したCamdenは、伝説ではなく事実を追求してブリテンの過去を再現しようと試みた。*History of Elizabeth* や *Remains Concerning*

Britain などによって、イギリスのあらゆる側面を紹介したCamdenの影響力は甚大なものであった。

2. William Dugdaleの著作群

William Dugdale (1605 - 86) はCamdenの*Britannia*に代表される好古学研究を拡大するような形で研究を進めたいわば正統派の実証的歴史研究者である。ポートレート(図2参照)に示されるように、多くの古文書を丁寧に分析し、整理して著書をまとめる手法を取った。Camdenから約半世紀遅れてウォリックシャに生を受けたDugdaleであるが、好古学者としては珍しく大学に行っておらず、しかし少年期より優れた学者との交流によって研究の道を独自に進んでいった。好古学研究を行う環境には大変恵まれ、1638年より紋章官として国王に仕える身となり、故郷ウォリックシャを離れてロンドンで生活することが可能となり、さらにロンドンにおいてはエクステッカー、ロンドンタワー、コットンライブラリなど、主要な文献を擁する施設における調査を存分に行うことができた。

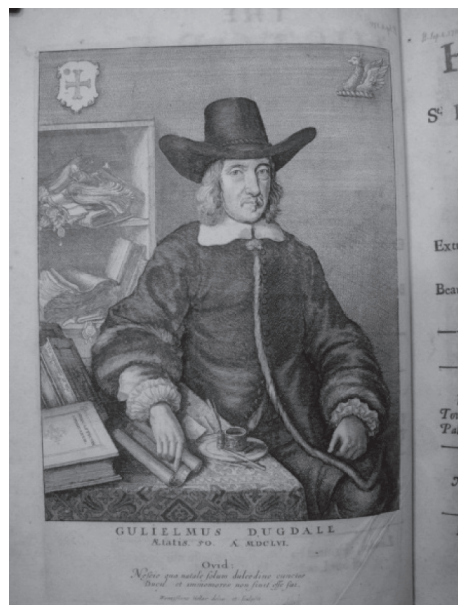


図2 William Dugdaleのポートレート

Dugdaleの書物の成功は版画家Wenceslaus Hollarとの出会いによるものが大きかったと言えよう。1650年代、ロンドンにいたHollarは数々の挿絵をDugdaleのために制作した。Dugdaleが

17世紀書物史を変えたと言ってもそれは過言ではなく、彼の版画なしに Dugdale による好古学書のこれほどまでの美術的価値は認められなかったのではないだろうか。もちろん、すべての版画が芸術の域に達するものではない。Hollar は日夜多くの作品を制作していたため、工房において、弟子などの助けを借りながら分業で出来上がった版画も多数存在している。その一方で、Hollar 自身がデッサンし、さらに彫刻した作品の完成度は極めて高く、他を擽んでている。

英国の過去を遡り、事実を記録するものとして Dugdale は 16 世紀の宗教改革以来顧みられなくなったカトリック教会の歴史に踏み込む *Monasticon Anglicanum* (英題: *Monasticon anglicanum, or, The history of the ancient abbies, and other monasteries, hospitals, cathedral and collegiate churches, in England and Wales. With divers French, Irish, and Scotch monasteries formerly relating to England.*) を 1655 年から出版している。この書物は 3 巻にわたって出版されたもので、各修道院、その付属協会、大聖堂などについて、それぞれ寄進の詳細や歴代の修道院長の氏名等、修道会の歴史的な歩みを詳述する。中世以来の修道院の土地所有の実態を説明するなど、それまで明らかでなかった修道院の内情までが書かれた重要な書物となった。ダグデールは修道会ごとにチャプターを設けて、ごく小さな教会を含めてその創立や由来を丁寧に記述した。フォリオ判でふんだんに挿絵が使用されている。

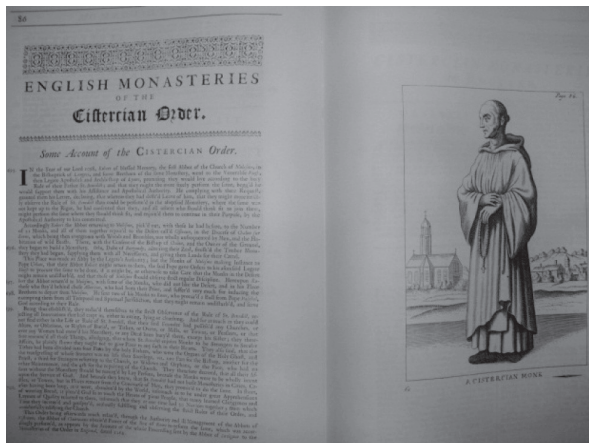


図 3 *Monasticon* から見開きページの例

この図はシトー会を扱うチャプターの冒頭部分であるが、*Monasticon* ではこのように見開きで修道会の歴史と修道士の装束を紹介している。それに続けて、各地の教会の歴史を簡潔に説明する。時代的には 1538 年より修道院自体は解体されていて、多くの建物が崩壊し、史料も減び行く頃のことである。そのような背景があり、宗教と政治は切り離すことが困難なデリケートな問題になっていた。あえて英国国教会以外の教会の研究に踏み込むことは敬遠されて当然であった。ところが Dugdale は英国の歴史の中で発展し大きく文化に寄与していた修道会の歴史を客観的に残したいと考えたのである。いかにも好古学者の発想であると言えよう。僧の装束を紹介する版画は決して卓越した作品とは呼べないものであるが、一方の大聖堂など建築物を残した版画は朽ちつつある多くの建築物の姿を残した点で偉大な意義を持つものとなった。最初はラテン語で出版されていたが、初版から約 40 年経過した後の 1693 年になって英語の要約版が出された。18 世紀になっても継続して補足版が出版されていたため、読者の間にこの書物への根強い興味関心があったことが証明されよう。

Dugdale はトポグラフィーの範疇に入る研究として『ウォリックシャの故事』(*The antiquities of Warwickshire illustrated; from records, leiger-books, manuscripts, charters, evidences, tombes, and armes: beautified with maps, prospects and portraictures*, 1658) を著した。タイトルからもわかるように、著者本人の故郷であるウォリックシャを細分して歴史をたどり、地域の中心的一族の系図や紋章を示すなどしている。また、主要な寺院の内部に関しては墓碑などの版画を添えて説明した。もっともよく知られた例を挙げるとすれば、ストラトフォードのホーリートリニティ教会にあるエリザベス朝劇作家 William Shakespeare (1564-1616) のモニュメントがある。これは Shakespeare の墓碑を描いたものとしては初めてのエングレイビングとされる。しかし実際のところ、最高の技術を持つ版画家 Hollar による作品の割には、実物と異なる不正確な部分が多く、むしろ滑稽なものに

仕上がっている。というのは、これは絵画を専門としない Dugdale が 1630 年代に描いたデッサンを基に Hollar が制作した版画であるためである。しかしその他のモニュメントはこの書物はやはりフォリオ判で出版された。初版は 1655 年で、同じころ Camden の *Remains Concerning Britain* の印刷を扱った Thomas Warren が手がけている。通常の書物とは異なり、取扱書籍商の名前がインプリントには記されていないが、これは著者本人が出版費用を負担し、読者に配布を行ったためであろう。17 世紀のうちに再版されることはなかったが、その後 18 世紀中期 1763 年には新たな版画も数十枚挿入されるなどした増補版が出版されている。

さらに詳細な教会の歴史の説明、微細な版画を含めた作品の例として、Dugdale は『聖ポール寺院の歴史』(*History of St. Paul's Cathedral in London*, 1658) を出版している。これは、Camden がウェストminster 寺院について著した書物と同じように寺院内部の碑文すべてを記録した内容の書物である。しかしこの書物において、目的は碑文の記録にとどまらない。時代的には、歴史ある教会が朽ちていくがまま放置され、あるいは公衆に濫用されていたときにあたる。Dugdale は、文献資料に残された中世以来の教会の歴史を整理して書物にまとめ、さらに物理的な姿を残すためにあらゆる方角から聖堂を捉えた 40 枚以上の版画を挿入した。内部のモニュメントの碑文にはそれぞれ版画があわせて掲載されている。聖堂内部全体の見取り図には中世以来の司教の墓碑、教会に関係の深い貴族の墓碑の位置が示され、それらはすべて別に個々の版画で紹介されている。また、四方から見た聖堂の外観も、細部にわたる聖堂内部の様子も版画に収められた。これによって、1666 年のロンドンの大火で失われた中世ゴシック建築の聖ポール寺院の姿が現在の読者にも鮮やかにそしておそらくかなり正確に把握できるのである。

版画は再び Hollar の手によるもので、特に聖堂の建築が鮮明に描かれているという点で、書物がテキスト本文以外の価値を大いに携えるように

なった例と考えることができる。また、この時代あたりから、版画によって読者にメッセージを強烈にかつ鮮明に伝えるということが、好古学書物において常套となった。書物が一種図鑑的な性格を帯びるようになったのは印刷の進歩による技術的な部分ももちろん大きい。

また、内部のモニュメントを残したものとしては、左側のページにモニュメント、右側にはモニュメントに刻まれた碑文が記される例が多い。いずれの場合にもフォリオサイズの版画のインパクトは強く、ウェストminster 寺院内の碑文を丁寧に記録した Camden の *Reges, Reginae, Nobiles et alii in Ecclesia Collegiata B. Petri Westmonasterii Sepulti* と比較して、書物としての進歩が見受けられるものとなっている。つまり、印刷・製本にかかわる技術部分の進展があり、ヴィジュアル面での影響力が比較にならないほど増大したと言える。著者の理想も読者の要求も書物の中に合わせて表現されている。

3. アトラスについて

Britannia は英国各地の地図を掲載し、町や河川の状況を明示したが、その後、同様に英国内のアトラスが出版されるようになった。代表的な書物は John Speed (1552 - 1629) の *The theatre of the empire of Great Britaine: presenting an exact geography of the kingdomes of England, Scotland, Ireland and the iles adioyning: with the shires, hundreds, cities and shire-townes, within ye kingdom of England* (1611) と John Ogilby の *Britannia* (1675) と言えよう。Speed は Camden とほぼ同時代人で、個人的にも交流があった人物である。フォリオ判で、大型の地図を中心とした書物となっており、17 世紀においては 1676 年にいたるまで数回のリプリントが行われた人気の高い書物となった。最終的には Book 1 がイングランドと諸島を、Book 2 でウェールズ、3 でスコットランド、4 でアイルランドの各地域についての地理と歴史を網羅している。のちに外国についても扱うようになり、中国を取り上げる部分では地図上に日本の姿も登場している。たとえば日本については国土の形状

も地名も決して正確とは言えないが、これは英国で初めて詳しい世界地図を掲載した記念すべき書物である。

一方の Ogilby は書物史に大きな足跡を残した人物である。ここで扱うのはアトラスについてだけであるが、彼のイソップ寓話は挿絵、予約出版などでよく知られる。Ogilby の *Britannia* は英国の主要道路をすっかりカバーする内容となっている。ローマ人が英国内でインフラ整備を行ったことはよく知られているが、この書物ではローマ時代からの道路が見事に地図の中に収められている。国民が様々な目的のために旅をすることも多くなってきたことが背景にあるのかもしれないが、1699 年には *The traveller's guide: or, a most exact description of the roads of England. Being Mr. Ogilby's actual survey, and mensuration by the wheel, of the great roads from London to all the considerable cities and towns in England and Wales, together with the cross-roads from one city or eminent town to another. Wherein is shewn the distance from place to place, and plain directions given to find the way, by setting down every town, village, river, brook, bridge, common, forest, wood, copse, heath, moor, &c. that occur in passing the roads. And for the better illustration thereof, there are added tables, wherein the names of the places with their distances are set down in a column, in so plain a manner, that a meer stranger may travel all over England without any other guide* と題する縮小版が出された。当初フォリオ判で出されていたものを「旅人の案内書」としてオクテーヴォ判としたものである。好古学書からヒントを得て作成された書物が実用的な地図に変化を遂げ、一般の生活に浸透していったことを示す例と言えよう。

4. 17 世紀後半の好古学書と読者層

王政復古後、さらに多くの好古学書が世に出されたが、特徴を持つ書物についての検討を行おうとすると、注目に値する著者が数名いる。ここでは 2 名を取り上げることとする。

Robert Plot (1640 - 96) は自然史を中心とす

るトポグラフィーの書物を著した好古学者である。彼はオックスフォード大学で学び、化学の教授として教鞭も取った。周囲のサポートもあって好古学研究を進め、ナチュラルリストとしての本領を發揮して 1677 年に *The Natural History of Oxfordshire* を大学出版より送り出している。この本は、オックスフォードシャの自然を、化石、動物、植物など幅広く取り上げて詳述するものとなっている。挿絵もふんだんに取り入れられ、同じページに複数の異なるオブジェクトが彫刻されたものなど、博物誌的な要素が見られる。



図 4 Plot の *Oxfordshire* より

これらはオックスフォードシャに生息する魚類、研究された植物や動物を示したものである。それぞれに番号が付けられ、テキストの中ではその番号を引用して、それぞれについて詳細に分析・説明がなされる。この本の中では、同じように複数のカットを 1 ページに収めた例がその他にもあるが、そのうちの 1 ページにおいて紹介する骨の一部を取り上げ、それが当時まだ認識されていなかった動物の身体の一部であったのではないかと論じてもいる。

この書物が好評であったため、これに続き Plot は *Natural History of Staffordshire* を 1686 年に出版している。この二つの著書はともに当時の国王チャールズ 2 世に献呈されている。チャールズ 2 世はオックスフォードに居住したこともあり、馴染みのある地域に関する研究であるためか最初の

著作については気に入ったようである。このことは *Staffordshire* の献辞からも読み取れる。これも内容としては前の著作と同じ傾向の書物であるが、こちらには壮大な建築物を扱う版画が複数挿入されている。

とくに目立つ特徴としては、巨大な邸宅を描く版画の中に、人物が多く描かれていることが挙げられる。*Dugdale* の *St. Paul's* は大聖堂の外観そして内部を見事に描写する版画が40数枚挿入されているが、人間の姿が含まれたものは1枚もない。つまり、当時の風俗を伝える要素はなく、あくまでも大聖堂の完成された姿を残したものとなっている。もちろん書物が作成された当時の大聖堂の荒れ果てた様子、濫用された状況を版画に残すことなど、*Dugdale* の意図ではなかったであろう。ゆえに *Plot* の *Natural History of Staffordshire* に刻まれた人々の姿は、当時のありのままの生活を伝え、一種の生活感を醸し出しており、書物に有機的な性格を付与している。

書物史の視点から見れば、読者の間にトポグラフィへの関心が高まってきたことが現れていると言えよう。より多くの購読者が資金面で協力をすることによって版画の中に紋章を刻ませるといったサブスクリプション出版制度が成立している。あとに出版された *Staffordshire* のほうが、個人の邸宅を扱う版画の数が圧倒的に多くある。そして自然史研究の要素よりもむしろ地誌的色彩が強くなっているのはこのこと、すなわちトポグラフィへの関心の高まりを裏付けているのではないか。

Natural History of Oxford は18世紀初頭に増補版が出版されたが、一方の *Staffordshire* は1686年の初版のみであった。後者は本文450頁、挿絵が地図を含めて37枚、しかもそのほとんどが見開きであり、当時としては豪華本である。再版されなかった理由には第一に *Oxfordshire* と比較して広範な読者層を捉えるものではなかったことが挙げられよう。それに加えて数多くの版画を含む書物の出版に莫大な費用がかかることが再版を困難にしたという可能性は否定できない。

最後に、個性的で例外的とも言える好古学者に

よる書物についても考察を行うべきであろう。17世紀を通して *Camden* が提供した研究方法に沿った研究が進められていた中、*Aylett Sammes* (1636-79) は一風変わった独自の好古学研究を行った。カムデンの *Britannia* を精読し、*Camden* に敬意を抱きつつも、サムズは特に言語面での研究を基にして、英国とフェニキアとの接点を強調した。彼が発表した唯一の作品 *Britannia* (1676) は、あまりに突拍子もない内容で、当時こそアンティークエリーの間ではある程度の評価を得ていたものの、フォリオ判で出版されたこの書物がその後再版されることはなかった。ただし、古典から読み取った内容を基に、自分自身のイマジネーションを働かせて創作したこの作品とそこに収められた版画の数々は大変独特で、書物史の観点から貴重だと言うことができよう。

この書物の大きな特徴のひとつは非常に独特な挿絵である。まず、古代ブリトン人の姿を示した版画(図5)を一つ目の例として挙げる。



図5 Sammesの *Britannia* におけるブリトン人

Sammes は、ギリシャの地理学者ストラボン(64BC-23AD)による描写を根拠に、ブリトン人が黒い服、長いコート、杖を身につけていたとして示している。また、背景に見える城や港の様子から、ブリトン人が文明社会を築いていたことが暗示される。母国への自負心が感じられるものであり、読者の共感を得たに違いないだろう。

一方のドルイドについては好古学者 *John*

Selden (1584-1654) の記述を基にして、背丈は2メートル超、裸足、フードをかぶり、あごひげを長く伸ばし、という姿で紹介されている。ドルイドはキリスト教が広まる以前の時代のいわば僧侶のような存在で、困難にある人を救ったり、罪びとを罰したりすることができたと書かれている。

また、ウィッカーマンの版画も非常に印象的である。これは遠い昔、罪びとをいけにえとして捧げるときに使用したもので、著者の豊かなイマジネーションに負う部分も多いであろうが、異教の風習を今に伝える貴重な版画である。



図6 ウィッカーマン



図7 異教の神々の像を描いた例

この書物は Sammes による唯一の出版物で、しかも再版されることはなかった。最大で1000部が発行されただけであると推測される。しかしたとえば *Britannia* 増補版の編者 Gibson が注の中で数回この書物に言及していることから、この作品

が17世紀末当時かなり知名度も評価も高かったと判断できる。再版にいたらなかったのは、フェニキアにルーツを求めるという発想が時代の経過とともに読者に受け入れられなくなったためなのかもしれない。しかし言語をもとに過去を辿ろうとする姿勢は17世紀好古学者の典型的アプローチと言える。今後再評価されるべき好古学作品の一つではないだろうか。

むすび

英国アンティークエリーの父的存在である Camden は、古文書の徹底的検討、遺跡・遺物の分析という研究方法において後世の好古学者に大きな影響を与えた。さらに、*Britannia* においてはトポグラフィー（あるいは地誌）というジャンルを定着させ、地方ごとに分割して歴史や地理を調査し記述するきっかけも作っている。16世紀半ばまで、イギリスの歴史は Geoffrey of Monmouth の *Historia Regum Britanniae* (*History of the Kings of Britain*、『ブリタニア列王史』) のような資料的価値の少ないいわば伝説が中心であった。しかし Camden の *Britannia* によって明らかに変革がもたらされ、事実を追求する姿勢が定着していった。Sammes のような例外はもちろんあったものの、17世紀アンティークエリーの歴史観は Camden の影響力を大いに受け、*Britannia* に示された方向性に沿って研究が展開されたと結論付けることができる。

Camden の *Britannia* 以来、好古学書はフォリオ判で出版された。価格的にも内容的にも読者層が限定されるものであったことは確かだ。これまで述べてきたように、地図や建築物、墓碑、遺物、その他もろもろの版画が挿入され、読者からの期待に応える書物となっていった。地図によって書物はより詳細で正確な情報を提供したし、ホラーの見事な版画によって書物は新たに芸術的価値をばらむようになり、また、サムズの豊かな想像力から書物は読者の好奇心をさらに掻き立てることとなった。

17世紀において、過去への興味はどのように変遷したか、好古学研究への関心はどのよう

なものであったのだろうか。書物からその答えを探ろうとすると、ひとつの鍵が Camden の *Remains Concerning Britain* ではないか。この書物は、1605年に初版が出され、その後7回改訂増補版を含め出版された。内容としては、決定版は1674年のものと言われるが、この1674年のものはオクテーヴォ判となる。これ以前の版は一回り大きなクォート判で出版されていた。通常は、良く売れる本の場合、*Britannia* がそうであったように、むしろ小さな判から大きな判へと変わっていく。しかしながら *Remains* については逆の現象が起きていた。これは書物史の観点からみて大変興味深いことだが、結果的にオクテーヴォ判にすることによって、当時の購読者はその本を持ち歩くことが容易にできるようになった。たとえば馬で移動する際に、コートポケットにしぼせて移動中にも読書をするのができたはずである。持ち運びに便利な判すなわちポケットブックにするということは、明らかにこの本が多くのご紳士に受容されていたこと、そして好古学が必ずしも机に向かわずに読めるような身近な題材になっていたことがうかがえるのではないだろうか。英国の歴史を辿る好古学研究も、17世紀終わりになるころには多くの人々が共通して持つ興味の一部になってきた。これはカムデンの功績ではなかっただろうか。書物の変容は社会の変化を映し出し、また、人々の思考を反映している。17世紀英国における好古学書の変容はこれを裏付けるに十分な資料であり、書物史上の遺産である。

註

- 1) 最近の包括的研究としては Angus Vines, *In Defiance of Time: Antiquarian Writing in Early Modern England* (Oxford: Oxford UP, 2010) がある。また、個別の好古学者に関する最近の研究としては、たとえば Jan Broadway, *William Dugdale: A Life of the Warwickshire Historian and Herald* (Gloucester: Xmera, 2011), William Poole, *John Aubrey and the Advancement of Learning* (Oxford: Bodleian Library, 2010) などが挙げられる。
- 2) Camden をはじめとする好古学者の伝記的情報は *Oxford Dictionary of National Biography* に拠る部分が

大きい。Camden については、Wyman H. Herendeen, 'Camden, William (1551-1623)', *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004; online edn, Jan 2008 [http://www.oxforddnb.com/view/article/4431, accessed 31 Oct 2012] 参照。

主要参考文献

一次資料

- Aubrey, John. *Monumenta Britannica* ed. John Fowles and Rodney Legg 3 vols. Sherborne, 1980-82.
- Camden, William. *Reges, Reginae, Nobiles et alii in Ecclesia Collegiata B. Petri Westmonasterii Sepulti* (1600)
- . *Britannia*, ed. E. Gibson (1695)
- . *Remains Concerning Britain* (1674)
- Dugdale, William. *Monasticon Anglicanum* (English translation, 1718)
- . *The Antiquities of Warwickshire* (1656; 1765)
- . *The History of St. Paul's Cathedral* (1658)
- . *The History of Imbanking and Drayning of Divers Fens and Marshes* (1662)
- . *The Baronage of England* (1675-76)
- . *The Life, Diary and Correspondence of Sir William Dugdale*, ed. W. Hamper (1827)
- Fuller, Thomas. *The Worthies of England* (1662)
- Jones, Inigo. *The Most Notable Antiquity of Great Britain Vulgarly Called Stone-Heng Restored* (1655)
- Milton, John. *The History of Britain* (1670; 1677)
- Ogilby, John. *Britannia* (1675)
- Plot, Robert. *The Natural History of Oxfordshire* (1677)
- . *The Natural History of Staffordshire* (1686)
- Sammes, Aylett. *Britannia Antiqua Illustrata* (1676)
- Speed, John. *The Theatre of Empire of Great Britaine* (1611).
- Stillingfleet, Edward. *Origines Sacrae* (1662)
- Wood, Anthony. *Athenae Oxonienses*. 2 vols. (1691 and 1692)

二次資料

- Kendrick, Thomas. *British Antiquity* (London, 1950)
- Parry, Graham. *Hollar's England* (Salisbury, 1980)
- . *The Seventeenth Century* (Harlow, 1989)
- . *The Trophies of Time* (Oxford: 1998)
- Pennington, Richard. *A Descriptive Catalogue of the Etched Work of Wenceslaus Hollar 1607-1677* (Cambridge, 1982)
- Piggot, Stuart. *The Druids* (London, 1975).
- Poole, William. *John Aubrey and the Advancement of Learning*. Oxford: Bodeleian, 2010.
- Powell, Anthony. *John Aubrey and his Friends* (London, 1948)
- Vine, Angus. *In Defiance of Time* (Oxford, 2010)